

## ■ ドル高の流れは一旦お休みへ!?

先々週の欧州中央銀行（ECB）理事会を皮切りにスタートした“中銀ウィーク”が先週末の日銀金融政策決定会合をもって幕を閉じた。結果的に、追加利上げを決定したユーロが売られる一方で、政策を据え置いたドルが強く買われることとなり、ユーロ／ドルは足元で1.05ドル処まで大きく値を下げる動きとなった。

少し振り返ると、欧州中央銀行（ECB）のラガル総裁は、定例理事会後に「我々は明らかに緩やかな低成長の時期にいる」と述べ、市場には「今回で利上げは打ち止め」との感が広まっている。欧州委員会が、最新の経済見通しでドイツの23年の実質成長率をマイナス0.4%と前回から0.6ポイントも下方修正したことを考えれば無理もないことではある。

今週に入ってユーロ／ドルは、今年の5月安値に続いて3月安値をも下抜け、昨日（27日）は1月6日につけた年初来安値＝1.0480ドルに顔合わせする動きを見せた。当面は、このまま1.05ドル処を明確に下抜ける展開となるかどうかが一つの焦点であり、差し当たっては本日発表される9月の独消費者物価指数や明日（29日）発表される9月のユーロ圏消費者物価指数の結果が大いに注目されることとなる。

これらの物価指標が目立って弱いものでない限り、ユーロ／ドルの1.05ドル処は当面の下値サポートとして機能すると見る。指標の結果次第ではあるものの、個人的にはそろそろ押し目買いのスタンスで臨んでもいいのではないかと考える。

なお、週足ロウソクで見ると、今週のユーロ／ドルは節目の62週移動平均線（62週線・現在は1.0575ドル処に位置）を下抜ける動きとなってきた。週末終値でも62週線を下抜けた状態のままであるか、一応は確認しておく必要がある。

もちろん、足元はドルの強さがあまりに際立っているということもある。とにかくにも、ここもとは米10年債利回りの上昇が止まらない。昨日は4.6%台に乗せる動きとなり、これは07年8月以来のこととなる。言うまでもなく、あの「リーマン・ショック」以前の水準ということになる。それは、やはり先週の米連邦公開市場委員会（FOMC）によって醸し出された市場のムードがなおも尾を引いていることに因る。

もちろん、日銀会合の結果があまりに肩透かしと言えるものであったことも見逃せない。前回更新分の本欄でも触れたように、過去の内田日銀副総裁の発言などから大方想像されていた内容ではあったものの、それを受けた円安進行の可能性に対してあまりに無防備な姿勢で、あえて市場の円売りを放置したとの感さえあったように思われる。

結果、昨日はドル／円が149円台後半の水準まで上値を伸ばす場面もあり、ここは当然のことながら150円処を誰もが意識するところ。むしろ、150円処は本邦政府・当局による介入への警戒が一層強まるところでもあり、そう易々と超えて行ける水準ではない。ドル高・円安の流れも一旦はお休みとなる可能性があろう。

そうでなくとも、目下の米国は全米自動車労組（UAW）のストライキや米議会对立に伴う政府閉鎖の可能性、学生ローンの返済再開など複数の課題・難題を抱えているわけで、それでもドルの上値を追い続けることには一定のリスクも伴うものと思われる。

今週末までは、月末要因によるドル買いが続く可能性もあると思われるが、月替わりになった途端にムードが変わる可能性もないではない。仮に米政府の一時閉鎖となれば、一旦はドルがショック売りに押されることもあろう。周知のとおり、目下は「ドル高」とあると同時に「円高」でもあり、仮にドルが一時的にも売られるとドル／円の下値余地は広がりやすくなる。そうしたことを踏まえたうえで、ここはドル／円を149円割れの水準を目安に、149円台後半の水準でショートする算段で臨みたいと個人的には考える。

（09月28日 10:40）